

平成26年度第二市場（京都市場）の取引状況について

1 牛の取引状況

(1) 国内生産状況（牛肉）

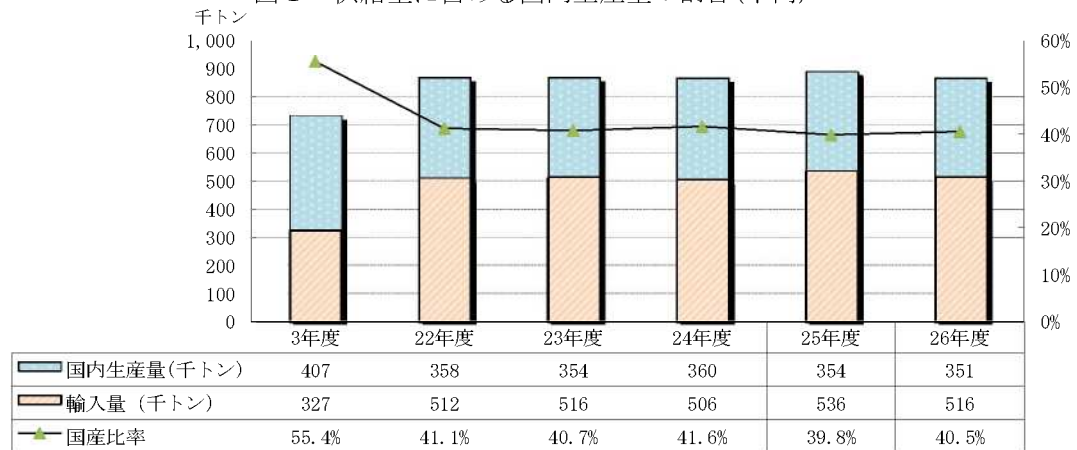
ア 平成3年度に、牛肉の輸入が自由化された。

イ 国産割合は、平成3年度には55.4%だったものが、国内生産量の減少及び輸入牛肉の増加に伴い低下した。

ウ 平成13年度以降、BSEの影響により牛肉の消費が減少していたが、平成18年以降は国内生産量、輸入量ともに増加傾向である。また、輸入牛肉の月齢緩和により、平成25年度の輸入量は増加した。

エ 平成22年度、同23年度に発生した自然災害等の影響により、素牛（仔牛の総称）等が減少していたため、平成26年度も全国的に成牛流通不足が生じることとなり、国内生産量についても減少（前年度比0.7ポイント下落）した。

図1 供給量に占める国内生産量の割合（牛肉）



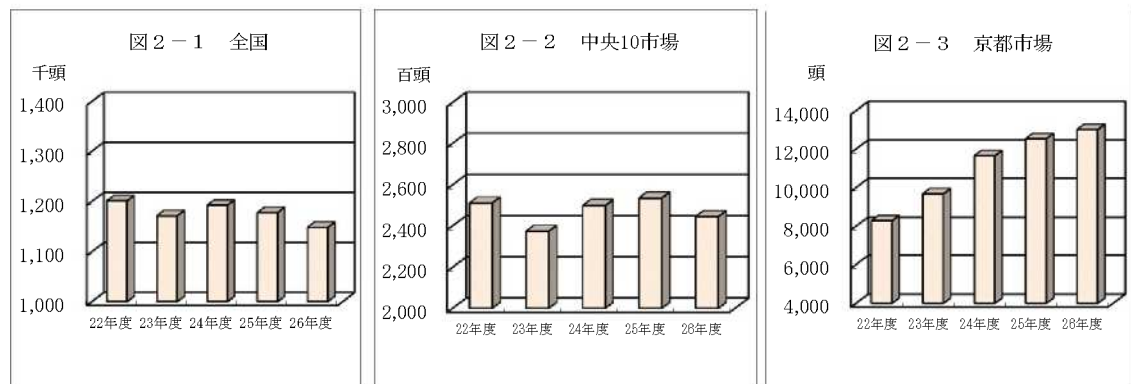
資料：alic「畜産の情報」

(2) と畜状況（成牛）

ア 全国のと畜頭数は、平成21年度以降はやや減少していたが、平成24年度は持ち直し増加。

平成26年度については、数年前に発生した自然災害等が影響し、全国的に成牛の流通不足が生じた結果、と畜頭数は前年度と比べ2.4%減少した。

イ 第二市場（以下「京都市場」という）の平成26年度のと畜頭数は、卸売会社による出荷者に対する営業の効果により、前年度と比べ479頭の増加（3.8%増）となった。



年度	22		23		24		25		26	
	頭数	前年度比	頭数	前年度比	頭数	前年度比	頭数	前年度比	頭数	前年度比
全国	1,201,560	▲1.2%	1,171,295	▲2.5%	1,192,096	1.8%	1,177,311	▲1.2%	1,148,854	▲2.4%
中央市場	251,237	0.5%	237,258	▲5.6%	249,919	5.3%	253,681	1.5%	244,595	▲3.6%
京都市場	8,281	2.9%	9,676	16.8%	11,632	20.2%	12,541	7.8%	13,020	3.8%

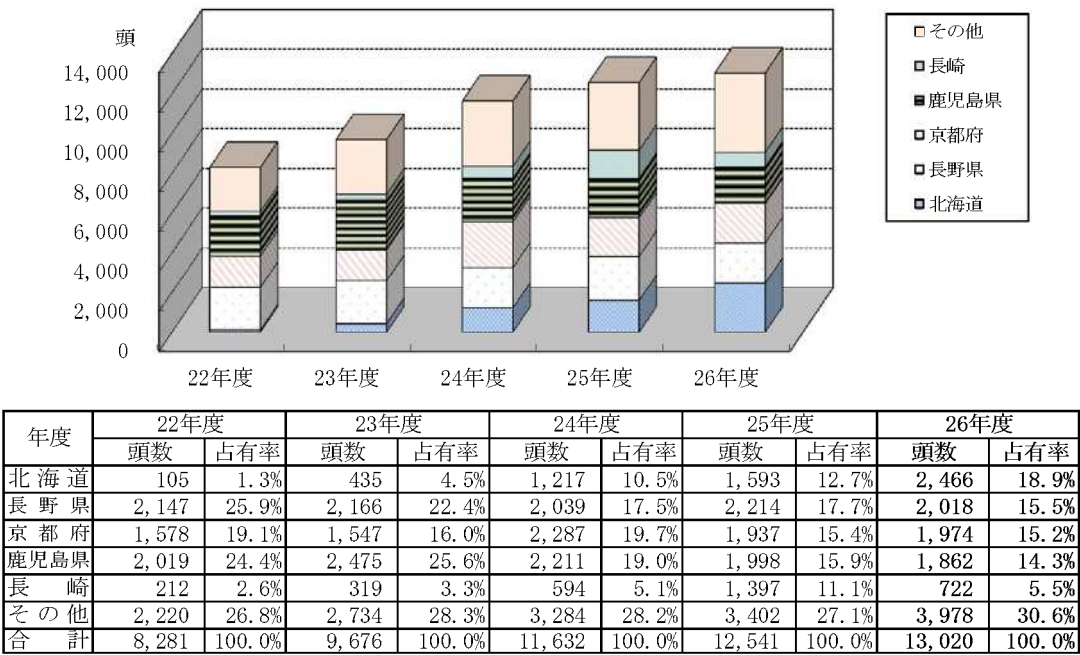
資料：全国はalic「畜産の情報」、他は「業務データ」

（単位：頭）

(3) 京都市場の出荷府県別と畜状況（成牛）

- ア 長野県、鹿児島県、京都府、北海道の4道府県で全体の6割強を占める（平成26年度）。
- イ 平成26年度は、京都府、北海道等からは増加し、長野県、鹿児島県、長崎県等からは減少した。

図4 出荷府県別と畜頭数（成牛）



資料：「業務データ」

(4) 京都市場の取扱金額（成牛）

- ア 平成24年度は、前年度に生じた食肉問題から消費者の意識が改善し、需要が高まったことを受け、1頭平均価格は前年度より2.5%増加した。
- 取扱金額については、1頭当たりの単価上昇及び大幅な入荷増頭の効果により、21.7%増加した。
- イ 平成25年度は、全国的な成牛流通不足による生産量減少の影響を受け、1頭当たりの平均価格は前年度より8.8%上昇した。
- 取扱金額については、1頭当たりの単価上昇及び入荷増頭の効果により、15.8%増加した。
- ウ 平成26年度も、昨年と同様に成牛流通不足による生産減少の影響を受け、1頭当たりの平均単価は前年度より8.9%上昇した。



(単位：千円)

年度	22年度		23年度		24年度		25年度		26年度	
	金額	前年度比	金額	前年度比	金額	前年度比	金額	前年度比	金額	前年度比
取扱金額	6,694,074	▲ 0.9%	7,543,076	12.7%	9,178,212	21.7%	10,623,932	15.8%	12,329,232	16.1%
1頭平均	759.9	▲ 0.8%	741.0	▲ 2.5%	759.6	2.5%	826.2	8.8%	899.6	8.9%

※ 取扱金額には、部分肉、副生物を含む。1頭平均は枝肉1頭当たりの平均価格。

※ 資料：「業務データ」

(5) 第二市場の卸売価格（和牛去勢）

- ア 平成13年に国内で初めてBSE感染牛が確認され、卸売価格は底値となった。その後、平成19年度までの価格は上昇していたが、次年度以降は総じて下降傾向にあった。
- イ 平成26年度についても、昨年と同様に、全国的な国産牛肉流通不足の影響を受け、全ての等級で価格は上昇した。

図6 卸売価格（和牛去勢）

（単位：1kg当たり／円）



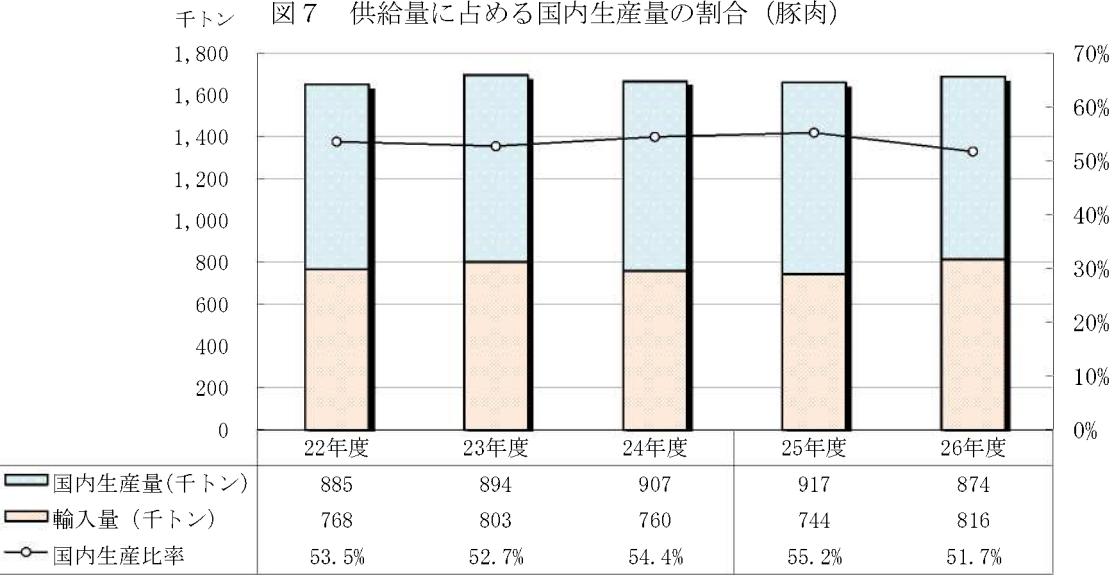
※ 資料：「業務データ」

2 豚の取引状況

(1) 国内生産状況（豚肉）

- ア 平成25年度の国内生産量は順調に推移し、前年度比1.2%増加
- イ 平成26年度の国内生産量は、前年度に発生したPED（豚流行性下痢）の影響により肥育豚が減少したため、国内生産量も減少（前年度比4.7%減）した。加えて輸入量が増加（前年度比9.7%増）した影響を受け、国内生産比率3.5ポイント減少した。

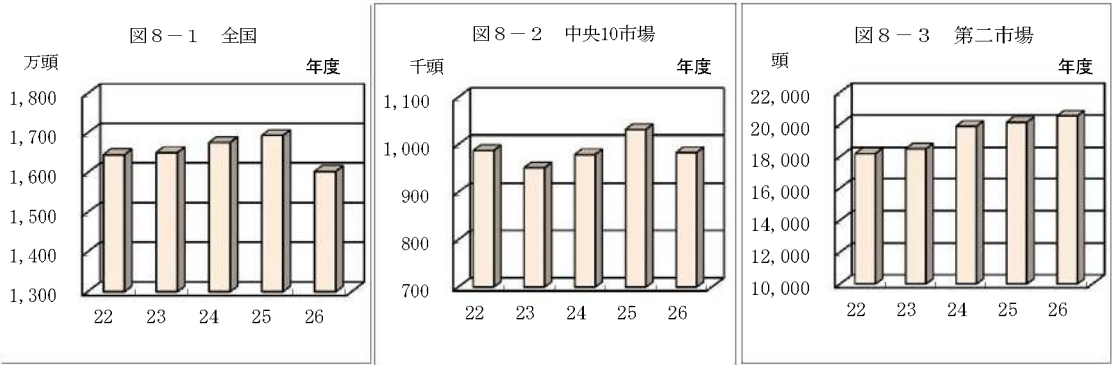
図7 供給量に占める国内生産量の割合（豚肉）



資料:alic「畜産の情報」

(2)と畜状況（豚）

- ア 全国のと畜頭数は、平成21年度までは増加傾向であった。平成22、23年度は自然災害等の影響により減少したが、平成24年度以降は順調に回復し、平成25年度については、前年度と比べ1.1%増加した。
- イ 平成26年度における中央10市場全体のと畜頭数は、前年度に発生したPED（豚流行性下痢）の影響により、減少（前年度比4.7%減）した。

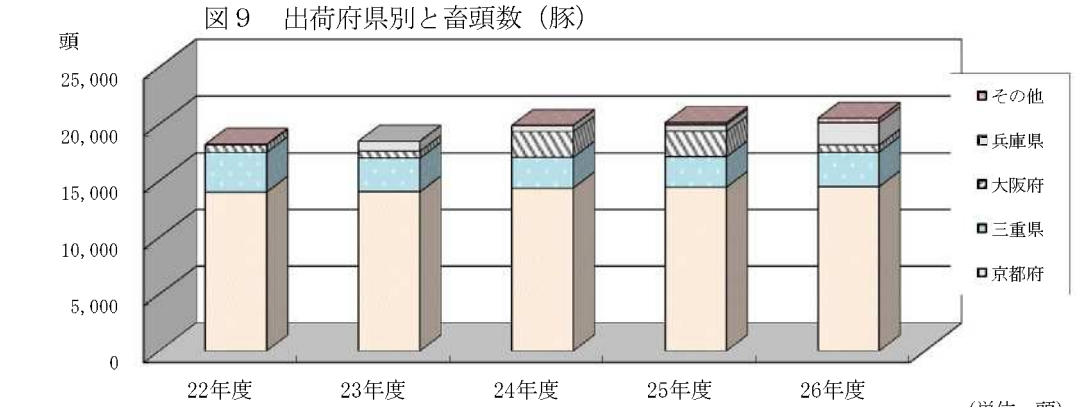


年度	22年度		23年度		24年度		25年度		26年度	
	頭数	前年度比	頭数	前年度比	頭数	前年度比	頭数	前年度比	頭数	前年度比
全国	16,620,939	▲ 2.7%	16,507,649	▲ 0.7%	16,752,939	1.5%	16,933,540	1.1%	16,033,570	▲ 5.3%
中央市場	987,303	▲ 2.7%	951,922	▲ 3.6%	979,460	2.9%	1,031,983	5.4%	983,225	▲ 4.7%
京都市場	18,175	4.1%	18,463	1.6%	19,876	7.7%	20,116	1.2%	20,516	2.0%

資料：全国はalic「畜産の情報」、他は「業務データ」

(3)京都市場の出荷府県別と畜状況（豚）

- ア 出荷府県の中心は京都府であり、全体の7割強を占める。
- イ 京都市場の平成26年度と畜頭数は、前年度と比べて400頭増加（前年度比2.0%増）した。



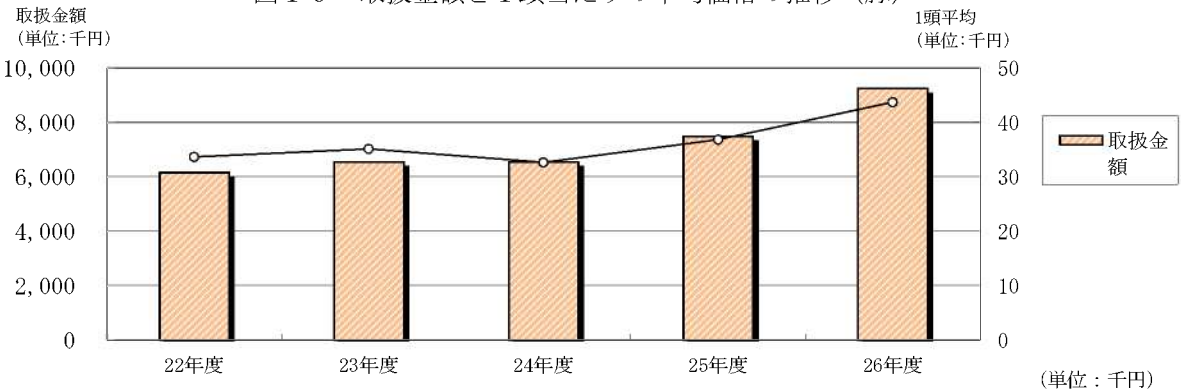
年 度	22年度		23年度		24年度		25年度		26年度	
	頭数	占有率	頭数	占有率	頭数	占有率	頭数	占有率	頭数	占有率
京 都 府	14,007	77.2%	14,041	76.0%	14,377	72.4%	14,444	71.8%	14,489	70.6%
三 重 県	3,468	19.1%	2,937	15.9%	2,677	13.5%	2,655	13.2%	3,020	14.7%
兵 庫 県	660	3.6%	626	3.4%	2,269	11.4%	2,248	11.2%	629	3.1%
大 阪 府	20	0.1%	859	4.7%	544	2.7%	585	2.9%	1,987	9.7%
そ の 他	20	—	0	—	9	—	184	—	391	—
合 計	18,155	100.0%	18,463	100.0%	19,867	100.0%	20,116	100.0%	20,516	100.0%

資料：「業務データ」

(4) 京都市場の取扱金額（豚）

- ア 平成17年度から平成20年度までは1頭平均価格は上昇傾向にあったが、平成21年度は過剰供給の影響により、前年度と比較して下落した。
- イ 平成25年度は、輸入豚肉の流通不足により、国産豚肉の引き合いが強まったため、1頭当たりの単価が上昇（前年度比12.9%増）した。
- ウ 平成26年度は、全国的な流通不足により、1頭当たりの枝肉単価は上昇（前年度比18.8%増）した。取扱金額についても、枝肉単価の上昇に加え入荷数も増頭したことにより、前年度比23.5%増加した。

図 1 0 取扱金額と1頭当たりの平均価格の推移（豚）



年 度	22年度			23年度			24年度			25年度			26年度		
	金額	前年度比		金額	前年度比		金額	前年度比		金額	前年度比		金額	前年度比	
取扱金額	616,074	15.1%		655,741	6.4%		655,458	▲ 0.0%		749,459	14.3%		925,238	23.5%	
1頭平均	33.6	10.5%		35.1	4.5%		32.6	▲ 7.1%		36.8	12.9%		43.7	18.8%	

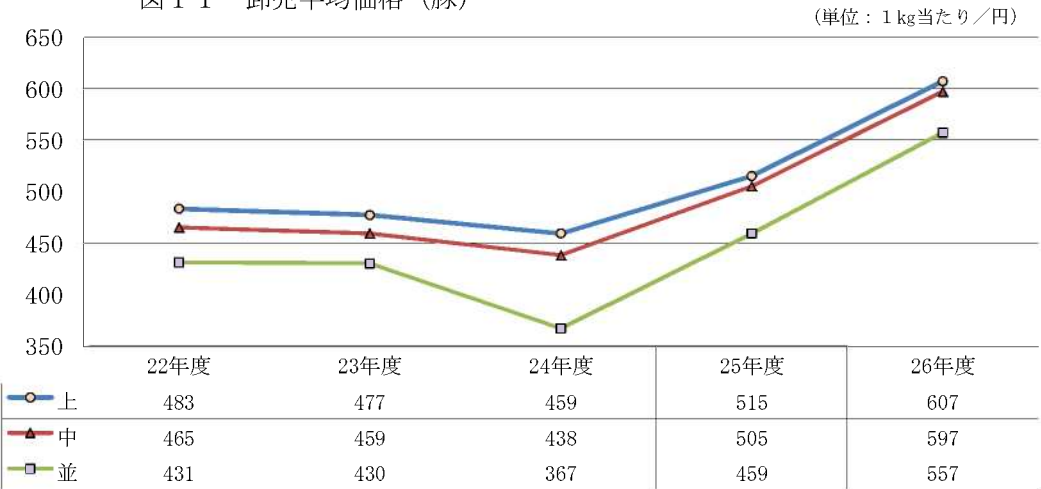
資料:「業務データ」

※ 取扱金額には副生物を含む。1頭平均は枝肉1頭当たりの平均価格

(5) 京都市場の卸売価格（豚）

- ア 平成22年度は、口蹄疫の発生、夏場の猛暑の影響や鳥インフルエンザの発生による、鶏肉不足の代替品としての需要の高まりを受け、枝肉価格は上昇した。
- イ 平成23年度は、牛肉に関する諸問題により、代替品としての需要が高まったが、枝肉価格についてはほぼ前年並みとなった。
- ウ 平成24年度は、消費者の購買意識が牛肉にシフトしたことから、豚肉の単価も下落した。
- エ 平成25年度は、輸入豚肉流通不足を起因とした全国的な高値相場の影響を受け、すべての等級で価格は上昇した。
- オ 平成26年度は、前年に発生したPED（豚流行性下痢）の影響により、生産不足が生じ、全国的に国産豚肉の流通不足となったため、すべての等級で価格が上昇した。

図 1 1 卸売平均価格（豚）



資料:「業務データ」